

ら、純増額は126億円と前月(130億円)をやや下回った。

既発債の利回りは、電々債・社債店頭気配とも7.5%を割ったが、その後は下げ渋りを示しており、銘柄選択買いの傾向が強まっている。

実体経済の動向

◇生産、需要とも引き続き停滞

8月の鉱工業生産(季節変動調整済み)は、前月比-2.5%とかなりの減少を示した。これには6月、7月に完工が集中した電力向け大型機械の著減という特殊要因も大きく影響しているが(注)、最近の動きを3か月移動平均によってならしめても、6月+0.4%、7月+0.2%、8月+0.2%(9月は速報値による)とほぼ横ばい基調が続いている。このように生産の回復が遅々としているのは、設備投資、個人消費などの民間最終需要が低調を続け、メーカーの製品在庫が高水準のままに推移していることなどを反映して、メーカーが生産抑制方針を持続しているためである。とくにいわゆる市況商品生産業種では価格の建直しをねらって、このところ生産調整が一段と強化されているものが多い。

(注) ちなみに電力向け大型機械を除いた鉱工業生産の前月比増加率を試算してみると7月-0.2%のあと、8月は-1.6%。

特殊分類別にみると、非耐久消費財を除いて各財とも減少したが、とくに資本財の著減が目立った。まず資本財では、一般資本財は化学機械、圧延機械などが久方ぶりに増加したものの、電力向け大型機械、工作機械、繊維機械、電線ケーブルなどの減産が響いて著減し(-10.5%)、輸送機械も鋼船、鉄道車両、三輪トラックなどを中心に減少した。また建設資材も耐火レンガ、塩化ビニール硬質板の減産を主因に減少を続けた。一方、消費財は非耐久消費財が繊維製品、食料品などを中心に微増したが、耐久消費財はカメラなど精密機

械の生産調整を中心にわずかながら減産となった。この間生産財は需要好調の化学肥料が増産したほか、石油化学、繊維でも増加したが、鉄鋼、機械工具など投資財関連産業の減産が続いて、全体では前月来の減少傾向を持続した。

なお、9月の生産(速報、季節変動調整済み)は、前月比+3.2%とかなり増加した。これには、内外需電力用大型機械の増産が大きく影響しており(これを除いて試算すると鉱工業生産は+0.6%の微増)、生産基調に格別の変化はみられない。

特殊分類別生産動向

(季節変動調整済み、前期(月)比増減率%)

	39年		40年		40年		
	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	6月	7月	8月
投資財	1.7	4.1	0	-2.5	5.0	1.6	-5.6
資本財	1.0	5.9	-0.4	-2.3	5.6	-1.7	-7.0
同(輸送機械を除く)	0.3	4.1	-1.4	-5.1	4.3	2.0	-10.5
輸送機械	-9.9	23.3	1.0	-1.7	7.8	-4.5	-2.4
建設資材	4.3	-1.1	1.0	-1.7	2.1	-0.3	-1.2
消費財	1.8	1.2	-0.7	-2.9	1.0	1.4	-0.2
耐久消費財	-1.2	-1.9	-2.8	-8.6	0.1	3.3	-1.9
非耐久消費財	3.3	2.4	0.5	0.5	1.3	0.4	0.1
生産財	3.7	1.9	1.1	0.4	4.1	-0.7	-1.4

(注) 通産省調べ(35年=100)。

一方、最近の需要動向をみても、輸出を除き依然低調に推移している。これを需要要因別にみると、財政支出は1割留保分の解除を中心に持直しみであるが(ちなみに国家財政の対民間支払額を季節変動調整済み計数でみると4~6月前期比-0.4%のあと、7~9月は同+5.0%)、民間需要は低迷を続けている。すなわち、設備投資が稼働率のいっそうの低下や企業収益の減少などを反映して減退傾向を脱しきれないほか、個人消費も、可処分所得の伸び悩みと消費性向の低下から、引き続き停滞状態にある。ただ中間需要である在庫投資については年央ごろまで大幅に減少してきた製品原材料在庫、販売業者在庫に在庫調整一巡の動きもうかがわれるが、これもさして盛り上がっていく情勢とはみられない。

こうした需要の低調持続を反映して、8月の鉱工業出荷(季節変動調整済み)は、前月比-1.0%

と前月に引き続き減少した。最近の動きを3ヵ月移動平均によってならして見ても、6月-0.1%、7月-0.2%、8月-0.2%(9月は速報による)と弱含み横ばいを続けている。特殊分類別には消費財が増加した反面、投資財、生産財が減少した。すなわち、一般資本財は生産同様電力向け大型機械、工作機械、電線ケーブルを中心に大幅減少(-8.8%)を示し、輸送機械も鋼船、鉄道車両などを中心に3ヵ月続けて減少(-2.0%)した。このため建設資材がセメント、鉄構物などを中心に増加(+1.8%)したものの、投資財全体では5%の減少となった。これに対して消費財では、非耐久消費財が出遅れていた夏物衣料の回復を中心に微増し、耐久消費財もラジオ、夏物家庭電器、自動二輪車を中心に増加(+4.0%)した。一方、生産財は引き続き低調で、化学肥料、石油化学製品、繊維などが増加したものの、鉄鋼半製品、機械工具、機械部品、伸銅品などを中心に減少(-1.4%)した。

なお、9月の出荷(速報、季節変動調整済み)は前月比+1.9%の増加となったが、これも大型機械の出荷増が響いたものである。

8月のメーカー製品在庫(季節変動調整済み)は前月比+0.4%と5ヵ月続けて微増した。このため、在庫率指数も133.6(前月比+2.0%)と高水準を続けている。生産活動の不振から需要が停滞傾向を強めている生産財の在庫増加が目立ち、メーカーの在庫調整は概してはかばかしい進捗を示していない。

製品在庫の動きを特殊分類別にみると、投資財は-2.1%の減少となった。しかしこれは、輸送機械で6月、7月と著増した乗用車、トラックに反動減など(-12.5%)がみられたほか、建設資材が生産調整持続の亜鉛鉄板、セメントを中心に減少(-3.3%)したためである。一般資本財は農業機械、汎用モーターなど一部の製品で減少がみられたものの、工作機械、風水力機械、電線ケーブル、エアコンディショナーなどが増加し、全体としては依然増加(+0.2%)を続けている。一方、

消費財は非耐久消費財がたばこ、医薬品などを中心に微増したが、耐久消費財は出荷増を反映して、夏物家庭電器、自動二輪車を中心に著減(-9.5%)した。この間生産財は化学(有機合成品、合成樹脂、石油化学製品)を除くほとんどの業種で増加したが、とくに鉄鉄、紡績糸などの増加が顕著であったため全体ではかなりの増加(+3.4%)を示した。

9月の製品在庫(速報、季節変動調整済み)は、輸送機械の著増を主因に前月比+0.9%と引き続き増加した。

生産・需給動向(鉱工業)

(季節変動調整済み、増減率は%)

	39年 7~ 9月	10~ 12月	40年 1~ 3月	4~ 6月	40年		
					6月	7月	8月
生 指 数	169.2	172.8	172.8	171.6	174.1	174.1	16.98
前期(月)比	2.7	2.2	0	-0.7	3.2	0	-2.5
前年同期比	15.6	12.4	7.7	4.2	4.0	3.0	2.1
出 指 数	163.0	166.0	168.6	168.3	169.6	168.0	166.3
前期(月)比	1.5	2.2	1.2	-0.2	1.4	-0.9	-1.0
前年同期比	13.2	10.5	7.9	4.8	3.5	3.0	4.3
製 指 数	199.5	215.4	217.9	220.8	220.8	221.2	222.1
前期(月)比	3.5	8.0	1.2	1.3	0.5	0.2	0.4
前年同期比	15.7	20.8	18.3	15.0	15.0	14.5	13.3
在庫率指数	119.7	128.1	128.7	130.2	130.2	131.0	133.6

(注) 通産省調べ(35年=100)。在庫は期末在庫。
前年同期(月)比は原指数による。

8月のメーカー原材料在庫(季節変動調整済み)は、前月比+0.2%の微増となった。とくに輸入分素原材料は鉄鉱石、鉄くず、原油、原綿を主因に前月比+2.6%とかなりの増加をみた。一方、国産製品原材料は機械メーカーの鋼材在庫、織物メーカーの原糸在庫が減少したため微減となったが、最近の動きを3ヵ月移動平均でならしてみると、5月-0.1%、6月+0.7%、7月+0.8%と強含みになっておりこうした動きからみて在庫調整は当面はぼー巡したとみられる。

なお、7月の販売業者在庫(季節変動調整済み)はマニラ麻、落綿など繊維原料を中心に、前月比-0.7%の微減となった。もっともうち製品在庫では、鋼材、繊維などに、市況上昇をながめた若

干の積増しがみられた。

最後に設備投資関連指標の動きをみると、まず8月の一般資本財出荷(季節変動調整済み)は、前月比(-8.8%)と大幅に減少した。電力向け大型機械を別としても、工作機械、繊維機械、風水力機械、電線ケーブルなどほとんどの製品での減少がみられた。なお、3ヵ月移動平均でならしてみても、6月-0.9%、7月-2.3%、8月+2.4%(9月は速報値による)となっており、大型機械の影響を除けば、停滞基調を示している。

一方、先行指標をみても、8月の機械受注(海運を除く民需、季節変動調整済み)は前月微増のあと-4.2%とかなりの減少となった。当月の場合、非製造業からの受注が電力業界の発注一服を反映して著減したことが主因であり、製造業からの受注は+5.6%の増加となっはいるが、これはこのところ受注減を続けてきた化学機械に、化学、食料品、石油精製業界からの発注がたまたま集中したほか、全般に前月著減の反動増があったことによるもので、基調的には依然低水準が続いている。

需要関係の指標

	39年 12月	40年 3月	6月	40年 6月	7月	8月
素原材在庫 (在庫率)	111.2 (72.6)	107.1 (71.4)	112.0 (68.4)	110.0 (68.4)	113.1 (73.4)	114.8 (75.0)
うち輸入分 (在庫率)	115.1 (69.8)	109.6 (68.5)	115.6 (66.7)	115.6 (66.7)	117.4 (69.7)	120.5 (71.7)
製品原材料在庫 (在庫率)	142.3 (86.9)	138.8 (84.6)	138.6 (81.9)	138.6 (81.9)	140.0 (84.7)	139.3 (85.8)
販売業者在庫	195.1	186.0	190.5	190.5	189.2	
	39年 10~12 月平均	40年 1~3 月平均	4~6 月平均	40年 6月	7月	8月
機械受注(海運を除く民需、 同季節調整済み)	592 (640)	645 (619)	551 (573)	554 (576)	539 (580)	515 (556)
機械販売除(船舶を除く) (同季節調整済み)	994 (1,081)	1,199 (1,152)	996 (1,063)	1,029 (1,046)	1,045 (1,397)	1,081 (1,114)
資本財出荷(輸送機械を除く)	181.4	181.3	173.0	172.2	172.8	157.6

(注) 在庫出荷は通産省調べ、季節変動調整済み指数(35年=100)。
機械受注、販売は企画庁調べ127社分。

◇商品市況は、鉄鋼、繊維に高値訂正の動きが目立つが、その他は総じて回復歩調

9月から10月前半にかけての商品市況をみると、7月以来続進歩調をたどってきた鉄鋼および

繊維に9月下旬以降騰勢一巡から高値訂正の動きが目立ち、また、化学などごく一部の商品に依然として軟弱基調を続けるものもみられた。しかし銅、鉛、石油、セメント、紙、砂糖などその他の多くの商品では引き続き徐々ながら地合いの改善が進んだ。

商品別にみると、まず鉄鋼では、薄板、厚板、条鋼類などが9月央ごろまで軒並み続伸したが、その後騰勢一服となり、9月末から10月初めにかけて各品目ともいっせいに反落商状を示した。これは、国内実需が官公需、民需ともに引き続き低迷していること、米国鉄鋼ストライキの回避などにより輸出成約が不振であること、大口需要家に対するメーカーの価格引上げ交渉が行き悩んだことなどを映じたものである。繊維では、生糸、人絹糸は引き続き堅調に推移したが、大宗品目である綿糸、スフ糸はインドネシアの政情不安による同国向け輸出に対する先行き不安や内需の停滞を映じて9月末から10月にかけて大幅な下げを示し、そ毛糸も不需要期入りから次第に弱含みとなった。また織物類も、9月末以降、原糸市況の軟化を映じ弱含みに推移しているものが多い。非鉄では、銅および鉛が、東南アジアや中央アフリカの政情不安、米国国内需要の堅調などを背景とした海外相場の高騰と、これに伴うくず類などの輸出増などから強含みに推移したが、亜鉛は亜鉛鉄板など需要業界の不振を主因に低迷を続けた。

また石油では、軽油は引き続きトラック関係需要の停滞から依然軟弱地合いを改めていないものの、ガソリン、灯油は生産調整ならびにメーカーの出荷手控えなどにより8月に引き続き強含みに推移した。セメントは、メーカーの市況対策が一段と浸透したほか、官公需が住宅、道路関係を中心に増加し、また民需も台風による災害復旧関係需要などをさきえに漸増しているため、引き続きじり高商状を呈した。紙は、下級紙が過剰在庫をかかえてなお弱含みを続けたが、上質紙は、出版界の需要期入りもあって引き続き需給の改善をみた。またこれまで軟弱な地合いを続けてきた板紙

も、不況カルテルの結成(白板紙)など生産調整の本格化を背景としてようやく底固め気運を強めてきた。砂糖は、高率操短の持続などによる地合いの改善に加え、糖価安定法にもとづく粗糖の下限価格が市中相場をかなり上回る水準に決められたこともあって9月上旬末以降急伸歩調をたどったが、10月にはいつてからは騰勢一巡となった。こうしたなかで、化学は、合成樹脂が一段と軟化したほか、基礎薬品類も品目によって区々ながら総じて弱含みとなるなど全般に軟弱な地合いを続けた。

このように最近の商品市況は、商品によってかなり区々な動きを示しているが、これを大別してみると、①ここ一両月人気の要因にささえられてすでにかんりの上伸を示し、最近に至って反落商状を示しているもの(鉄鋼、繊維)、②供給抑制を主因とした地合いの漸進的改善により比較的堅調に推移しているもの(非鉄、石油、セメント、紙、砂糖など)、③引き続き軟化を続けているもの(化学など)の三つのグループに整理することができよう。まず第1のグループである鉄鋼、繊維は、生産調整による供給量の減少見越しや政府の需要

喚起策に伴う需要増加期待などにささえられて7月以降市況回復の主役を演じてきたが、①期待された国内実需がその後も官公需、民需ともに依然として停滞の域を脱するに至らなかったこと、②加えて、インドネシアの政情不安や米国の鉄鋼ストライキ解決などから、輸出需要にも先行き不安が生じたこと、などから、これまで市場をささえてきた先高人氣が次第に薄らぎ、ついに高値修正を余儀なくされることとなったものである。第2のグループである非鉄、石油、セメント、紙、砂糖など多くの商品は、このところ徐々ながら底固めないしはじり高商状を続けている。これには、もちろん海外高、季節需要の台頭など各商品固有の要因もあるが、これらに共通の背景として生産抑制をささえに需給バランスの改善が着実に進んでいることが指摘できよう。一方、第3のグループである化学などごく一部の商品は、依然軟弱な地合いを脱していない。これは、これら商品が生産財生産の原料であるため、生産財業界における生産調整の本格化に伴い需要がここにきてむしろ減退し、これに応じた化学業界などの側の生産調整が十分でないことなどに起因するものと

卸売物価指数の推移

(単位・%)

	引締め前 37/11 ~38/11	引締め後 38/12 ~39/11	引締め解除後 39/12 ~40/9	最近の推移							
				40年 7月	8月	9月	9月 上旬	中旬	下旬	10月 上旬	
総平均	+ 3.7	- 0.7	+ 0.8	保合	+ 0.3	+ 0.5	+ 0.3	+ 0.2	+ 0.1	- 0.1	
食料	+ 9.2	- 4.0	+ 5.2	+ 0.3	+ 0.5	+ 0.8	+ 0.4	+ 0.4	+ 0.2	- 0.3	
繊維	+ 11.1	- 6.7	+ 0.8	- 0.2	+ 1.2	+ 1.0	+ 0.8	+ 0.1	+ 0.2	- 0.3	
鉄鋼	+ 4.2	- 0.5	- 1.1	- 1.2	+ 0.9	+ 0.9	+ 0.1	+ 0.4	保合	- 0.2	
非鉄	+ 1.1	+ 19.9	- 0.5	- 1.3	+ 0.5	+ 0.4	+ 0.4	+ 0.1	- 0.5	保合	
金属	+ 0.2	+ 3.6	- 0.1	- 0.4	- 0.1	- 0.5	- 0.4	保合	+ 0.1	- 0.1	
機械	- 1.4	- 0.4	- 0.3	- 0.1	- 0.1	保合	保合	保合	保合	保合	
石油・石炭	+ 0.8	- 0.8	+ 1.1	+ 0.1	- 0.4	- 0.2	+ 0.1	- 0.1	- 0.2	+ 0.1	
木材	+ 3.6	- 1.1	+ 1.1	+ 2.1	+ 0.5	+ 2.3	+ 0.8	+ 1.5	+ 1.6	+ 0.2	
窯業	- 0.2	- 1.5	+ 0.3	+ 0.1	- 0.1	- 0.3	- 0.1	保合	保合	保合	
化学	- 0.2	+ 2.3	- 0.6	- 0.6	- 0.3	保合	保合	保合	保合	- 0.1	
紙・パルプ	+ 6.4	+ 2.7	- 4.2	- 0.5	- 0.8	- 0.6	- 0.2	- 0.1	保合	保合	
雑品	同水準	+ 0.7	+ 0.6	保合	保合	+ 0.1	保合	保合	+ 0.1	+ 0.1	
工業製品	+ 2.9	- 0.8	- 0.1	- 0.3	+ 0.2	+ 0.3	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.1	- 0.1	
非工業製品	+ 6.3	- 0.4	+ 3.7	+ 0.6	+ 0.7	+ 1.1	+ 0.4	+ 0.6	+ 0.5	- 0.3	

みられる。今後の見通しとしては、鉄鋼、繊維がここ当分大勢頭打ち商状を続ける一方、石油、セメント、紙などの商品は生産調整の効果によって引き続き徐々ながら地合いの改善をみると思われる。反面、化学などは、目先きなお弱含みに推移する公算が大きい。

9月の本行卸売物価は前月比+0.5%と続騰した。これは、非鉄、木材、食料(鶏卵、豚肉など)などが上昇したほか、月中を通じてみれば鉄鋼、繊維も続伸したためである。もっとも旬別にみると、鉄鋼、繊維、非鉄などが旬をおって頭打ちとなったため、前旬に比べ、上旬は+0.3%、中旬+0.2%、下旬+0.1%と次第に伸び悩みとなった。なお、10月上旬は前旬比-0.1%と反落を示したが、これは、前述のような鉄鋼、繊維の反落のほか、食料の下落などを映じたものである。

9月の消費者物価(東京)は前月比+2.0%と大幅に続騰した(季節商品を除いても+0.8%と続

騰)。これは、生鮮魚介や野菜が台風の影響によって急騰したほか、秋冬物衣料の季節高もあって大幅な上昇となったものである。なおこの間、家賃地代や自由料金も根強い上昇傾向を続けた。

9月の本行小売物価(東京)は前月比+2.6%と大幅な上昇を示した(生鮮食品を除いても+1.8%)。この主因は、消費者物価同様、冬物衣料品の季節高や台風被害による野菜、魚介類の高騰である。

9月の輸出物価は前月比+0.2%と続騰した。繊維品が綿糸布、スフ織物、生糸などを中心に続騰したほか、食料(冷凍まぐろ)、雑品目も上昇したことによる。一方輸入物価は、前月比-0.5%と続落した。これは、鉱物(ズングン鉄鋼石)が年度間契約更改に伴い大幅下落となったほか、石油、石炭、雑品目も下落したためである。反面繊維(原毛、原綿)、金属(鉄くず、鉛)はわずかながら上昇した。なお、以上の結果、交易条件指数は大幅な好転を示した。

消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位・%)

		対前年度比 上昇率		最近の推移			最近月 の前年 同月比
		38年度 平均	39年度 平均	40年 7月	8月	9月	
消費者物価 (東京)	総合 (季節商品を除く)	+7.2	+4.7	-0.8	+0.4	+2.0	+8.7
		+7.0	+4.6	-0.1	+0.2	+0.8	+6.3
	食料	+7.9	+4.8	-1.7	+0.7	+3.7	+12.8
	家賃地代	+10.7	+9.0	+0.1	+0.1	+3.4	+8.9
	公共料金	+5.3	+3.8	保合	保合	保合	+5.8
	自由料金	+18.2	+11.0	+0.6	-0.3	+0.5	+10.0
	その他商品	+2.6	+2.0	-0.5	+0.4	+0.8	+3.0
	被服	+5.6	+2.1	-0.8	-0.1	+2.4	+3.6
	光熱	-0.1	-0.1	-0.1	-0.1	+0.1	+0.4
	住居雑費	+4.5	+4.1	+0.2	+0.2	+1.2	+4.4
	+8.4	+6.5	+0.2	-0.1	-0.1	+7.4	
本行小売物価	総平均 (生鮮食品を除く)	+4.5	+2.6	-0.3	-0.7	+2.6	+5.5
		+4.6	+1.9	+0.2	-0.4	+1.8	+4.4
	食料 繊維	+6.3	+5.3	-0.6	-0.4	+2.3	+8.3
	+4.3	-0.8	保合	-2.4	+6.2	+4.7	
本行輸出入物価	輸出	+2.7	+0.8	-0.2	+0.3	+0.2	-0.6
	輸入	+4.4	-0.8	-0.1	-0.3	-0.5	-2.2
	交易条件	-1.6	+1.5	-0.1	+0.6	+0.7	+1.6

◇外国為替収支引き続き黒字

9月の外国為替収支は総合で8百万ドルの黒字となった。資本収支ではこれまでと同様大幅な逆調(125百万ドルの赤字)が続いているが、経常収支が季節的な要因もあって一段と黒字幅(135百万ドル)を増大したためである。貿易収支は、輸出が高水準を保っている一方、輸入が季節的な減少をみせたことから、引き続き黒字幅を拡大した(黒字額192百万ドル、前月175百万ドル)。もっとも、季節変動を調整してみると、輸入がやや増加したため貿易収支の黒字は120百万ドル強と前4か月の黒字(月平均約150百万ドル)を若干下回った。これに対し、貿易外収支は、期末に伴う利子配当、手数料などの季節的支払増加もあって引き続き大幅な赤字(57百万ドル)となった。次に資本収支では、長期資本、短期資本とも、今までと変わらぬ赤字基調(それぞれ37百万ドル、88百万ドルの赤字)を示した。長期資本では、借入金がインパクト・ローンやガリオア・エロア債務の返済によりかなりの返済超過となった上、対外投資も

日本輸出入銀行の対ブラジル銀行貸付があつて増高をみた。短期資本では、ユーロ・ダラーは流入超となったが、引き続き輸出ユーザンスが増加し、輸入ユーザンスが減少しているほか、短期インパクト・ローンの返済が多額に上っている。

輸出は、前年同月に比べ為替ベースで+27%、通関ベースで+25%と高水準を続けた。しかし、

為 替 収 支

(単位・百万ドル)

	40年			40年		
	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
輸 出	602 (450)	677 (512)	735 (578)	730 (571)	740 (584)	734 (580)
輸 入	551 (543)	591 (549)	562 (507)	578 (537)	565 (484)	542 (501)
貿 易 収 支 尻	51 (△93)	85 (△37)	173 (71)	152 (34)	175 (100)	192 (79)
貿 易 外 収 支 尻	△44 (△36)	△58 (△37)	△56 (△39)	△51 (△35)	△59 (△35)	△57 (△46)
経 常 収 支 尻	7 (△129)	28 (△74)	117 (32)	101 (△1)	116 (65)	135 (33)
長期資本 収 支 尻	5 (23)	△10 (42)	(△24) (28)	△15 (22)	△19 (35)	△37 (25)
短期資本 収 支 尻	11 (99)	△44 (42)	△80 (△54)	△90 (△69)	△61 (△36)	△88 (△57)
資 本 収 支 尻	16 (122)	△54 (84)	△103 (△26)	△105 (△47)	△80 (△1)	△125 (△32)
誤 差 脱 漏	△6 (△14)	△11 (△30)	△8 (△5)	△19 (26)	△2 (△52)	△2 (11)
総 合 収 支 尻	17 (△21)	△37 (△20)	6 (1)	△23 (△22)	34 (12)	8 (12)

(注) カッコ内は前年同期(月)額、各期月平均。

輸出入指標(季節調整済み)の推移

(単位・百万ドル)

	為 替			通 関		信用状		輸出	輸入
	輸出	輸入	貿易 尻	輸出	輸入	輸出	輸入	認証	承認
39年									
10~12月	594	573	21	618	697	518	290	636	626
40年1~3月	655	543	112	679	659	561	279	740	580
4~6月	693	565	128	712	689	588	300	754	626
7~9月	725	585	140	738	675	598	307	755	659
40年5月	704	556	148	723	675	594	302	759	639
6月	716	559	157	727	726	593	290	742	586
7月	713	562	151	750	652	604	308	745	638
8月	732	587	145	765	670	594	300	782	653
9月	731	606	125	699	704	595	314	739	686

(注) 1. 季節調整はセンサス法による。各期月平均。
2. 輸入承認は39年4月以降計上方式が変更され統計の連続性が不完全となったため季節調整も不完全である。

季節変動を調整した動きでみると輸出の増勢はここ一両月鈍化しているようにうかがわれる(季節変動調整後の輸出為替を3ヵ月移動平均してみると、年初ごろから大体月率2~3%で推移してきた増加率が最近2ヵ月は1.3%、0.7%と低下)。商品別(為替統計)にみても、これまで好調を続けてきた自動車、船舶、鉄鋼など主力商品の伸び率は若干落ちてきている。

輸出信用状、認証などの先行指標も前年同月に比べれば約2割増と依然高水準にあるが、季節変動を調整した実勢では、ここ4~5ヵ月来と同様、当月も横ばい状態となっている。信用状の内訳をみると、化学品、機械、水産品が順調なほか、鉄鋼もソ連向け鋼管の増加など一時的要因にささえられて、とも角も好調を維持したが、これらを除くと伸び悩みぎみであり、とくに雑貨、綿製品などは不振となっている。市場別には、欧米

輸 出 信 用 状 の 内 訳

(単位・百万ドル)

	40年			40年		
	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
食 料	21 (+0)	22 (+15)	31 (+17)	39 (+16)	28 (+16)	25 (+19)
織 維	111 (+18)	115 (+16)	118 (+13)	115 (+9)	126 (+23)	112 (+8)
木 製 品	14 (+9)	15 (+7)	16 (+7)	17 (+11)	15 (+0)	16 (+9)
化学製品	43 (+54)	41 (+31)	44 (+49)	41 (+28)	44 (+52)	47 (+69)
金属製品	132 (+87)	138 (+47)	138 (+25)	135 (+16)	130 (+17)	150 (+41)
機 械	132 (+44)	143 (+44)	148 (+28)	149 (+24)	150 (+36)	145 (+24)
雑 貨	63 (-5)	72 (-6)	59 (-13)	61 (-10)	63 (-9)	53 (-20)
そ の 他	44 (+27)	37 (+13)	35 (+13)	37 (+7)	36 (+21)	33 (+11)
北 米	214 (+40)	241 (+41)	236 (+25)	244 (+23)	237 (+24)	226 (+26)
欧 州	72 (+29)	65 (+12)	76 (+36)	83 (+37)	69 (+18)	75 (+58)
ア ジ ア	173 (+36)	167 (+17)	171 (+14)	162 (+6)	176 (+23)	174 (+15)
そ の 他	101 (+22)	108 (+16)	116 (+9)	115 (+1)	119 (+22)	114 (+5)
合 計	560 (+34)	583 (+25)	598 (+20)	604 (+15)	601 (+23)	590 (+21)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。

向けが好調なのに対し、アジア、アフリカ、南米などの低開発地域向けに伸び悩まないし停滞のきざしがうかがわれる。これは低開発諸国における外貨不足や対日片貿易是正のための輸入抑制の動きの影響によるのではないかとみられる。

一方、輸入は、前年同月比では為替ベースで+8%、通関ベースで+7%と、これまでとほぼ同程度の増加率を示した。しかし、前年9月の輸入がそれまでに比べて若干高かったこと、季節変動調整後の輸入為替がここ一両月増加傾向をみせていることなどを考慮すると、最近の輸入水準がひとところに比べいくぶん高くなっていることは否定できない。こうした最近の輸入増は、主として、飼料、雑食料などの増加が比較的根強いのに加え、一部原材料においても、7月ごろまで在庫圧縮の意図などから正常の水準以下に落ち込んでいた輸入規模が在庫削減の一巡に伴いほぼ正常な水準に復したためではないかとみられる。そのほか、当月は木材、石油などに一時的な入着増もあった模様である。

先行指標面では、前年同月に比し輸入承認は2%増、信用状は5%減となっており、今までと特に変わった動きはみられない。最近の輸入水準は前記のとおり若干上昇みであるが、先行指標がこのような比較的落ちついていること、国内の経済活動が投資、消費とも停滞状態にあることなど

からみて輸入が先行き急増する懸念はまずあるまいと思われる。

輸入承認品目別内訳

(単位・百万ドル)

	40年	4~	7~	40年		
	1~			6月	9月	7月
	3月					
食料	119 (+10)	125 (+31)	117 (+25)	125 (+45)	99 (+19)	126 (+14)
原材料	328 (+10)	352 (+26)	346 (+8)	352 (+11)	334 (+11)	353 (+4)
原綿	39 (+5)	31 (+9)	27 (-21)	24 (-41)	23 (+12)	33 (-17)
原毛	28 (-15)	27 (+4)	26 (-3)	28 (-4)	25 (+14)	25 (-14)
鉄鉱石	28 (+32)	34 (+29)	37 (+42)	38 (+32)	33 (+28)	39 (+72)
くず鉄	11 (-26)	14 (-7)	12 (-41)	11 (-45)	13 (-41)	13 (-39)
木材	32 (+20)	38 (+50)	39 (+17)	39 (+10)	41 (+35)	38 (+7)
石油	81 (+18)	81 (+38)	82 (+27)	77 (+36)	83 (+19)	86 (+26)
化学製品	35 (-13)	41 (+23)	37 (-4)	8 (-8)	37 (+1)	37 (-4)
機械	48 (-29)	77 (+13)	49 (-10)	48 (-6)	62 (-7)	38 (-19)
鉄鋼	11 (-2)	14 (+15)	10 (-31)	12 (-13)	11 (-19)	8 (-54)
その他	41 (+15)	54 (+30)	54 (+25)	51 (+18)	66 (+48)	44 (+7)
合計	583 (+4)	662 (+25)	613 (+9)	625 (+13)	608 (+11)	606 (+2)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。
39年4月以降は計上方式が変更されたのでそれ以前の計数とは連続しない。